くるみちゃんへ

高藤　良旭

「くるみちゃんは？」

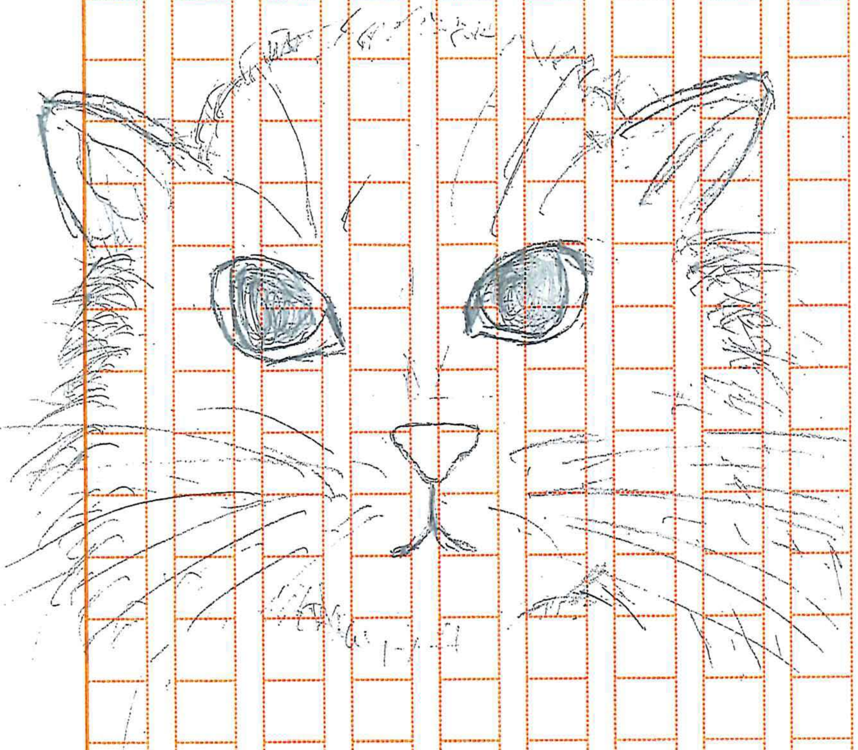
僕の家では家族のみんなが家に帰ると、猫のくるみちゃんのことを聞いていた。いつもくるみちゃんが家族の真ん中にいたように思う。

くるみちゃんは僕が二歳の時にうちに来た。ぼくのお弁当のおかずの卵焼きを食べてしまったり、僕がレゴで遊んでいると同じようにレゴをさわっていたり、僕が宿題をしていると机の上にのってきて宿題が終わるまで見てくれたり、ふわふわのお腹に僕の顔をつけたらゴロゴロいったり、嫌がっているのに抱っこするから僕のことを嫌がってにげていったり、くるみちゃんがいることは僕には当たり前のことだった。

そんなくるみちゃんが今年の春に大きな病気をしていることがわかった。病院に行ってもどんどん悪くなり、夏休みがもうすぐ終わるある日、僕が家に帰るとくるみちゃんは箱

の中に入れられていた。
「くるみちゃん、かずきの帰りが待てなかったみたい。お母さんが抱っこしてお兄ちゃんとおばあちゃんに見送られてお空にいったよ」と祖母から聞き、くるみちゃんをいっぱいさわっていっぱい泣いた。
ぼくの家にきてくれてありがとう。いやなことをしても我慢して僕につきあってくれてありがとう。ふわふわの毛をさわらせてくれてありがとう。

くるみちゃん、本当にありがとう。



コクヨ　ケー10　20×20